

「ファクト」主義の新たな調査報道：ワセダクロニクルの発信

渡辺 周

ワセダクロニクル編集長 www.wasedachronicle.org/

ワセダクロニクルは2月1日、早稲田大学を拠点にした非営利の調査報道メディアとして、創刊特集「買われた記事」の発信を始めた。なぜ今、調査報道に特化したメディアを立ち上げたのか。権力者やネット上での無責任な声ばかりが大きくなり、「うそも100回いえば真実になる」という状況が生まれやすい中、「ファクト」で対抗するためだ。「ポストトゥルース」などという言葉が回るのは異常だ。

「ポストトゥルース」に対抗するには、今のメディアが読者や視聴者に提供する「ファクト」は弱い。ファクトを得る手段を官公庁や企業の発表に頼っているからだ。だが発表する側は、自分たちの都合のいいことしか発表しない傾向がある。力あるファクトは、潜伏している。

朝日新聞名古屋本社で調査報道を担当していたとき、以下のような記事を書いた。

——東日本震災の日、海外から成田空港と羽田空港に着陸予定だった86機の飛行機が地震で着陸できなくなり、日本全国の空をさまよっている間に燃料が不足し、14機が「緊急事態宣言」を出していた——

巨大地震という非常事態に加え、国交省が空港の受け入れ態勢を非常時用に切り替えなかったことなどが要因だが、一歩間違えば大惨事だ。本来なら、大災害やテロに備えた空港の受け入れ態勢や、飛行機が搭載する燃料にどれくらい余裕を

持たせるかを再検討する必要がある。しかし、このことを国交省も航空会社も公表していないかった。関係者への取材と情報公開請求を繰り返し、半年以上かけて全国版の1面トップで記事にした。国交省や航空会社の取材のため、名古屋と東京を往復した。

国交省を含め官公庁には、記者クラブがあり報道各社の記者が常駐している。だが「明日分かることを今日書く」ことには熱心でも、時間をかけて執念深くファクトを掘り起こす努力が足りないのではないかと。記者クラブに張り付いているだけでは、強いファクトは得られない。せいぜい、既定路線で当局には影響のないリークに触れられるだけだ。

ワセダクロニクルにはジャーナリスト志望の学生も20人ほどいて、調査報道の現場を間近で体感してもらいながら教育している。卒業後にそれぞれが進む新聞社やテレビ局で活躍し、日本のジャーナリズム全体が底上げされることを期待している。学生にいつもいっているのは「向こう岸に渡れ」ということだ。

私たちの信条は「不正や強い力の犠牲になる人の側に立つ」ということだ。

しかし、犠牲者に寄り添っているだけでは何も変わらない。犠牲者がいる岸から、犠牲者の声を伝えるべく向こう岸に石を投げただけでも変わらない。向こう岸に渡って、相手が隠蔽しているも

のを掘んでくることが調査報道だ。「論」を展開するのも、向こう岸に石を投げている範疇を超えないと思う。「あなたの考えとは違う」といわれてしまえば弱い。そこから平行線だ。

風穴を開け、事態を動かすのは「ファクト」だ。しかもそれは、隠蔽されたものを掘り起こして得られるファクトだ。

とはいえ、調査報道を実践するのは骨が折れる。訴訟リスクがあり、時間とカネがかかる。その割に部数や視聴率には反映されないから、経営環境が厳しくなっている昨今、大手の新聞社やテレビ局は消極的なのが現状だ。朝日新聞にいた時、スポーツカーの大手企業が関係するテーマを上司に打診したところ、「社員の家族が路頭に迷うようなことはやめてくれ」と真顔でいわれた。

だが思い起こしてほしい。日本の新聞社は戦前、戦中と戦争を煽って部数を伸ばし大メディアに成長したものの、国は潰れたのではなかったか。パンほしさに記事を書いていたなら、剣が強くなって最後はペンを持ってなくなつたのではないかと。「パンは剣より強し」などとカッコイイことをいう前に、「パンがパンに負けた」のだ。そして今、同じことを繰り返そうとしているように思えてならない。政治家から「マスコミを懲らしめるためには広告をなくせばいいい」と馬鹿にされるのは、情けない。

ワセダクロニクルには「パン」が不足している。大学からの資金や企業からの広告収入はなく、寄付モデルをとっている。立ち上げ資金は主にメンバーの自費でまかなった。給料もまだない。メディア関係者からは「俸給をいってやったって、カネに困ってじきになくなると」という声も聞かえてくる。

しかし、「パンほしさにパンを曲げない」ワセダクロニクルだからこそ、創刊特集の「買われた記事」は発信できているのだと思う。電通や製薬

会社が関係する今回のサマーマーケティングキャンペーンの取材しないし、当事者である朝日新聞紙にいたっては今のところ「逃げの一歩」もな回答すらしてこない。

広告や課金ではなく寄付モデルを取るのには、「ファクト主義」の調査報道を支えるためだ。

広告や課金モデルの場合、ページビューの多さや視聴率、部数がとても重要になってくる。多くの人に記事を読んでもらうため、芸能人のスキャンダルに力を入れたり、記事の自身から逸脱するようない見出しをつけたりする。ファクトの十分な検証がなく、「フェイクニュース」の温床になるケースもある。

その点、寄付は「社会を改善するための公共性がある」と判断してもらえなければ得られない。ファクトの質が求められる。フェイクニュースの入り込む余地はない。

幸いにして、クラウドファンディングでの寄付は、募集期間を2カ月余り残した段階で、当初目標の350万円を超える435万円が集まっている。

寄付者は「お客様」ではなく「同志」だと思っている。同志と共に、ファクト主義を徹底した調査報道メディアを作り上げていきたい。

渡辺 周

わたなべ まこと

1974年神奈川県生まれ。2000年に日本テレビから朝日新聞に入社し、特別報道部などで調査報道を担当する。高野山真宗の資金運用や製薬会社の医師への資金提供の裏面などを報じたほか、原発事故後の長期連載「プロメテウスの翼」では、高レベル廃棄物の処分場をテーマにした「地底をねらえ」、福島県大熊町のルポ「原発地下町」を執筆した。2016年3月朝日新聞を退社し、早稲田大学ジャーナリズム研究所を拠点とする調査報道メディア「ワセダクロニクル」(http://www.wasedachronicle.org/)の編集長に就く。趣味はマラソン。普段は100kg程度の体重があるが、フルマラソンでは82kgまで落ち、4時間20分台で完走する。